

むかし、むかしな、江戸時代の中頃の話だ。小山の横町に、穂積屋紺吉という人がいたと。「コンコンチキナのコン吉さん」というあだ名だった。そのあだ名のようなきつね面ではなく、まん丸顔で、でっかい図体をしていて、いつもにこにこしていたという。草相撲の大関を張っていて、しこ名を狐川と言ったと。

ある日、愛宕さまの裏山で、大きいムジナを捕まえた。とぼけたような顔つきをした古ムジナだった。その首を麻縄で結わえ、裏庭に飼っておいたと。朝、昼、晩と、餌をやり、「狐とムジナは同類だ。さあさあ、狐川関にご挨拶、ご挨拶。」と言いながら、櫓の棒でつついてかわいがっていたと。

ところが、なにしろ力持ちなのでムジナの方では痛くてしょうがなかった。そこである夜、ムジナは、たまりかねたものか、麻縄を噛み切って、逃げてしまったと。紺吉は、がっかりして、あちこち探しまわったがムジナは見つからなかった。

二、三日たったある晩、天王さまの神主さまが訪ねてきたと。神主さまは、「毎晩、お宮の木を盗みに来るものがある。このままでは、まわりの木がなくなって、お宮が丸裸になる。」と言った。そこで紺吉は、「今夜中に盗人を捕まえましょう。」と約束したと。

真夜中を過ぎて、紺吉は、櫓の棒と麻縄を持って、お宮の境内をまわったが、盗人の姿はどこにもなかった。そこで、起きて待っているはずの神主さまを訪ねて、社務所の戸をトントンと叩いたが、神主さまは、なかなか出てこない。

やっと、神主さまは起きてきて、「こんなおそくに何事じゃ」と怒鳴り、「わしは、朝から腹痛を起こして、一日中寝ていた。」と言った。紺吉の言い分を聞くと、「狐川関が、キツネに化かされおったな。ははは。」と大笑いしたと。「わかった、わかった。お前さん、キツネかタヌキかムジナがわしに化けおったのじゃよ。」

それを聞いた、紺吉は、「そうそう、そのムジナめに違いない。」と言い、先ごろ逃げられたムジナのことを話した。「神主さまに化けるようなムジナは、何をするかわかったものではない。すぐに、退治しなければなるまい。」紺吉は、盗人を捕まえるつもりだったが、今度は、ムジナを捕まえることにして家に帰ったと。

その日の夕方、近所の人を呼び集め、ムジナ退治の相談をした。一人の老人が、こんなことを言った。「雨戸をトントンと叩く音がしたら、さっと雨戸をあけて、「しめた」と大声でどなると、ムジナは驚いて立ちすくむから、そこを捕まえればわけはない。」皆も賛成したので、手ぐすねひいて、ムジナを待った。

夜も更けて、雨戸をトントンとたたく音がした。そこで、雨戸をがらりとあけると、ムジナがいた。「しめた」とどなると、櫓の棒で撲って捕まえた。皆で相談して、四つ足を縛って、軒先にぶら下げた。明日は久し振りの、ムジナ鍋だと、話がまとまり、それぞれの家に引き上げていった。

さて、翌朝、紺吉が雨戸を開けると、ムジナはいなくて、縄だけがぶらさがり、紙切れが残っていたと。文字のようなものが書いてあったので、神主さまのところに持っていった。神主さまが首をひねって読んでくれたところでは、こう書いてあったと。

コンコンチキナのコンキチさん
いたずらムジナにだまされて
腹立ちまぎれのムジナ鍋
煮られぬ先に、はいさようなら

神主さまに化けるくらいだから、こんな文句くらいはたやすい芸当だったのだろう。「さようなら」を告げたムジナは、どこか遠いところへ行ってしまう、近所で変わったことは何も起こらなくなったということだ。